大阪・溝咋（みぞくい）遺跡

1　所在地　大阪府茨木市学園町

2　調査期間　一九九五年（平7）三月～一九九六年二月

3　発掘機関　㈶大阪府文化財調査研究センター

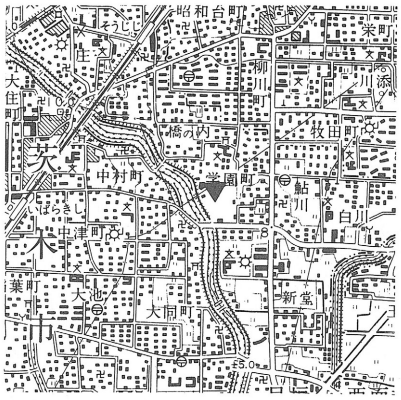
4　調査担当者　合田幸美・伊藤　武・橋本亜希子

5　遺跡の種類　集落跡・水田跡

6　遺跡の年代　弥生時代中期～古墳時代後期、奈良時代、中世～近代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

溝咋遺跡は、大阪府の北部に連なる北摂山地に端を発する安威川の左岸に位置し、調査地とその周辺には、淀川とその支流により形成された沖積地が広がる。調査地は浪商学園の跡地で、調査に入る段階では、市街化が進んだ住宅地に残された広大な空地であった。



（大阪東北部）

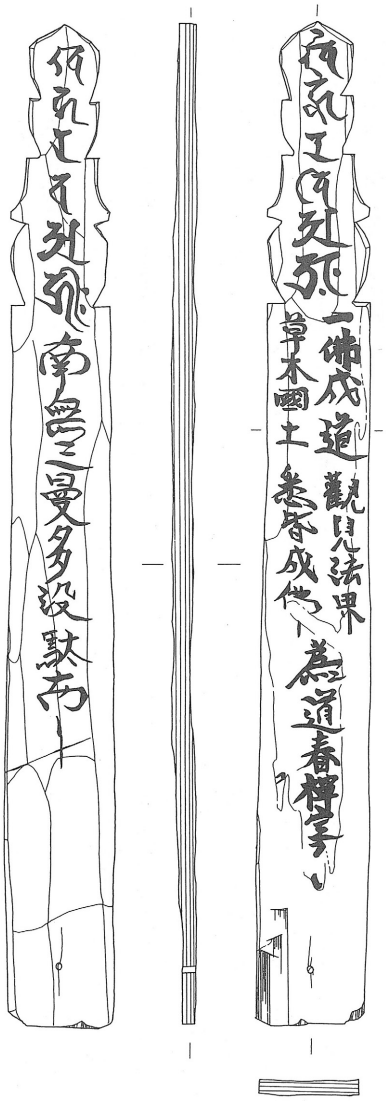
溝咋遺跡の対岸、下流約三〇〇ｍのところには延喜式内社である溝咋神社が立地する。溝咋神社は『日本書紀』にも散見する三島溝咋耳命、玉櫛媛命、神武天皇の皇后とされる媛蹈鞴五十鈴媛命を祭神とする。調査地内には溝咋神社上の宮があったが、一九〇九年に下の宮であった現溝咋神社に合祀された。今回の調査で中世前半にまでさかのぼる上の宮の遺構が検出された。

溝咋遺跡では、このほか古墳時代前期を中心とする、弥生時代中期～古墳時代後期の集落と水田が検出され、両者を関連付けて考えることが可能である。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物には、銅釧・小型倣製鏡・人面線刻土器の他、多くの外来系土器が含まれ、他地域との交流が盛んな集落の様相が想定される。奈良時代の遺物としては、上の宮の下層で平城Ⅲ期に位置付けられる一群の土器が、後述する河川一の東肩部下層から平城Ⅲ期に位置付けられる墨書土器が、それぞれ出土した。墨書土器は須恵器杯身であり、底部外面に「奈肯」の文字が残り、下半は欠損のため不明である。その他、河川一の西肩部下層から鈴が一点出土した。調査地中央に位置する上の宮以外の調査地では、中世以降近代までの水田遺構が検出された。

調査地中央では幅七～九ｍ深さ一～一・五ｍの南北に貫流する河川一を、一八五ｍにわたり検出した。堆積土は粗砂が主体であり、最下層には礫が堆積する。中世以降、溝を掘り直し、肩部を杭打ちと盛土により成形している。溝内からは、古墳時代～近世の遺物が

出土し、溝底からは人の頭蓋骨の一部が出土した。河川一は、条里の坪境の大溝であり、天坊幸彦氏の摂津三島郡条里の復原（「摂津三島郡の条里」『歴史地理』五四―三　一九二九年）によると、調査地周辺は島上郡と島下郡の郡境にあたり、調査地は島上郡一二条六里もしくは島下郡二条六里に比定される。

河川一は南端で幅がやや広がり、そのほぼ中央で堰が検出された。堰は直径約一〇cmの丸太材を数十本打ち込んだもので、その南側には深さ七〇cmの窪みがある。堰の北側では東へ折れる溝が複数条検出されており、堰は南流する水をこれらの溝に導水するための施設と考えられる。堰の丸太材にさかさまに引っかかった状態で、卒塔婆が一点出土した。墨書の内容などから、一四世紀のものと考えられる。



8　木簡の釈文・内容

(1)　・「（梵字）一佛成道　観見法界
草木国土　悉皆成佛為道春禅定□　。」
・「（梵字）南無三曼多没駄南□　。」

303×33×7　061

「五輪塔形」で、下半部は調整によりやや薄くなるが、端末まで残存する。最下部中央に穿孔がある。

表面の梵字は胎蔵界大日真言の「[illegible]（kham hum ra vi a）」と虚空蔵菩薩の種子「[illegible]（trāḥ）」、裏面は四方五大種子の「[illegible]（kha ha ra va a）」と阿弥陀如来の種子「[illegible]（hrīḥ）」である。

（合田幸美）